

エコフェミニズムの目指す社会

萩原 なつ子

独立行政法人 国立女性教育会館理事長

はじめに

「緑と政治」というテーマから、真っ先に私の脳裏に浮んだのがドイツ「緑の党」元代表のペトラ・ケリーだった。もはやペトラ・ケリーの名前や存在を知っている人は少ないかもしれない。ケリーは1979年にドイツにおいて、平和・人権・環境を政策の中心とした「緑の党」（緑の人々）が旗揚げされた際の中心的なメンバーだった。1983年から1990年まで、旧西ドイツの連邦議会で「緑の党」の代議員として活動している。1982年に、「軍縮と社会的正義と人権へのエコロジカルと環境保護的な関心を結びつける新たな視点を編み出し、それを具体的な実現へ向けて前進させた」ことにより、もう一つのノーベル賞といわれる「ライト・ライブリフッド・アワード」(1980年RAL財団創設)を受賞している。著書に『希望のために闘う』(Um Hoffnung Kämpfen)がある。

はぎわら なつこ

1956年山梨県生まれ。お茶の水女子大学大学院修士課程修了。博士(学術)。トヨタ財団アソシエイト・プログラムオフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学助教授、立教大学社会学部教授・21世紀社会デザイン研究科教授等を経て、2022年4月より現職。認定特定非営利活動法人日本NPOセンター代表理事。立教大学名誉教授。

著書が出版された1985年は、「国連婦人(女性)の10年」¹の最終年にあたり、ケニア、ナイロビで「第3回世界女性会議」(7月)が開催された年である。この会議は「環境と女性/ジェンダー」という概念が国際社会において主流化する端緒となる会議として重要である。なぜならば、自然環境の破壊による影響は女性、とりわけ貧困女性に影響を与えることが指摘され、採択された「女性の地位向上のための将来戦略」(ナイロビ戦略)の重点項目のひとつに「環境」が位置づけられたからである。そして環境保全活動への女性の参加・参画の促進や、生態系管理者としての女性の参加、環境保全活動を通じた経済的報酬の獲得などが目標として掲げられている。

おそらく「環境」が重点項目になったからだと思うが、今となっては貴重なケリーの「第3世界にも目を、ケリー・西独「緑の党」元代表に聞く」と題したインタビュー記事が残されているので紹介する(「婦人の十年いままでこれから③」日本経済新聞社、1985年7月17日夕刊)。ケリーは「国連婦人の10年はたしかに女性の地位向上を後押ししたが、まだ不十分」であり、「先進国の女性は、もっと第3世界の悲惨な状況に目をむけない」として、次のように述べている。長くなるが引用する。

「経済発展は、男たちに恩恵をほどこしても、しばしば女性はその分け前にあずかれないどころか、かえって搾取される結果にもなってきた。今

後、私たちは第3世界の女性への波及効果を考えながら、さまざまな課題に取り組まなくてはいけない。地方政治に、またコミュニティ運動にと、女性の力を結集していくことだ。途上国への開発援助も、その国の女性たちが自立できるよう、これまでとは違った形で行う必要がある。先進工業国で「私たちの」大地をとりもどす運動を展開すると同時に、「彼女たち」の地球を奪い返す手助けをするのだ。反核、環境保護などの運動で女性が全面に立って奮戦するのを見るにつけ、私は自分たちの内に秘めた力の大きさを思い知るのである。文化は違っても性差別は万国共通だ。今や対外援助はフェミニストの問題でもある。「支配」に抗すべく、世界中の女性たちがこれまで以上に手を結ばなくてはならない。」

女性たちに連帯を熱く呼びかけたケリーは、1992年に配偶者の手により突然に命を絶たれてしまった。その悲劇を告げるニュースを見たときの衝撃を今でも鮮明に覚えている。ケリーは、思想としてまた運動としてのエコロジーとフェミニズムの交差性に着目して研究を進めていた私にとって、とても重要な活動家であり思想家の一人であった。なぜなら、ケリーは「人間と自然の共生をめざすエコロジカルなフェミニストの考え方に基づいた真の自由な社会を創ることは、すべての人々の共通した目的である」と述べ、環境政策や平和政策における「エコロジカルなフェミニスト」の視点の重要性を認識していたからである。

エコロジーとフェミニズムとの交差

なぜ私が、公害問題、自然破壊等の環境問題を最大の課題とし、人間と自然の共生を唱えるエコロジーと女性に対する差別や不平等の解消を目指すフェミニズムに関心をもつようになったのかについて述べておきたい。

私は幼少期から公害問題や環境問題に関心を持っていた。というよりは、持たざるを得なかった世代である。「もはや戦後ではない」と「経済白書」に

記された1956年に生まれ、1960年代～1970年代の高度経済成長と共に育ち、その負の側面として、私たちの命や健康を脅かす公害のニュースが連日新聞の一面やニュースで大きく報道されていたからである。とりわけ妊娠中の母親の胎盤をすり抜けた水銀の影響で生まれた、私と同年の胎児性水俣病患者の存在は、生態系の破壊や食の安全・安心への関心と共に「環境と女性／ジェンダー」を研究テーマにする原点であると言っても過言ではない。

フェミニズムの主張を自分事として捉えるようになったのは、企業の就職活動が解禁された大学4年生の秋である。男女雇用機会均等法がない時代、自宅通勤者以外の、加えて強力なコネのない4年制大学卒業予定の女子学生には、ほとんど入社試験を受ける機会すらなかった。しかも「容姿端麗」という条件まである企業も少なからずあった。やっと就職した小さな広告代理店だったが、数ヶ月で結婚退職することになった。当時は慣行・慣習として女性のいわゆる、「寿退職」はあたりまえであった。どうして生物学的に女性であるということが、就職の機会の不平等、結婚退職、そして男女賃金格差などにつながってしまうのか。その社会構造を明らかにしたくなり、アルバイトと子育てをしながら社会学部に学士入学。卒業論文のテーマは「制度としての性差」。そして、数ヶ月ではあったが広告業界に身を置いたことで感じた疑問、すなわち企業広告の多くが、いかに消費者の購買意欲を高めるかに主軸がおかれ、「環境」を意識したものがほとんどないことへの違和感と「大きいことはいいことだ…」という当時のキャッチコピーに代表される、大量生産、大量消費、大量廃棄のライフスタイルへの疑問が環境問題やエコロジー思想への関心に私を導くことになった。

いうまでもなく、この時代は、日本のみならず世界的に地球規模の環境破壊や汚染や資源エネルギーの枯渇化が表面化し、人間の生活様式そのものの在り方が問われ始めた時である。そして市民による豊さへの問い直しや生態系を破壊しない、自然と共生しうる生き方が模索され始め、エコロジー運

動、消費者運動、反核運動が始まったのである。こうした世の中の動きを背景に登場したのがエコロジカル・フェミニズムである。

「エコロジカル・フェミニズム／エコフェミニズム」は、フランスの作家であり、フェミニストのフランソワーズ・デュボンヌ (Françoise d'Eaubonne) が1974年に、その著書“Le Feminisme ou la mort” (『フェミニズムか死か』) で用いた造語である。デュボンヌは著書の中で、現在の地球環境破壊と女性への性差別や植民地支配の問題を引き起こしたのは家父長制的資本社会であると述べ、男性優位の社会システムを変えない限り、根本的な解決にならないことを指摘している。エコロジカル・フェミニズムはアメリカに渡り、さらに発展することになる。

以上が、私が、自身の経験や疑問を通して、エコロジーとフェミニズムと出会い、その交差性について興味を持った背景である。

ちなみに、私がエコロジー (Ecology) という言葉を最初に目にしたのは、夫の書棚に並べられていた英国の雑誌『Ecologist』と『Resurgence』である。10歳年上の夫は環境問題に早くから関心を持っていたようで、1960年代に創刊された両誌を創刊号から購読していたのである。「エコロジーって何?」と聞く私に夫は一言、「エコロジーを知るにはマレイ・ブクチンの思想を学ばないとね」。マレイ・ブクチン? 誰? とりあえず、創刊号を手にとり、ページをめくってみると、環境問題はもとより、人種差別、男女差別などの人権問題、開発途上国の問題など、当時、世界で課題となっていることが論じられている環境問題研究の専門誌だった²。

エコロジーは魔法の言葉ではない

本格的にエコロジーとエコフェミニズムの理論を学ぶきっかけは、購読していたカナダの雑誌『女性と環境』(Women & Environment) に掲載されていたソーシャル・エコロジー研究所 (Institute for Social Ecology、米国バーモント州) の夏期講座の案内を見つけ、参加したことに始まる。ソーシャル・エ

コロジ研究所の所長がマレイ・ブクチン (Murray Bookchin) だったのである。1989年6月、ブクチンは初めての日本人受講生である私を驚きと共に温かく迎え入れてくれた。

エコロジー、非暴力、社会的公正、草の根民主主義の4つの理念を掲げるドイツ「緑の党」の創設にも関わり、思想的バックボーンとなっていたブクチンからは、ソーシャル・エコロジーのイロハを学び、アメリカにおけるエコロジカル・フェミニストのパイオニアと言われているイネストラ・キング (Ynestra King) からは平和運動、反核運動や環境運動に女性がどのようにかかわっているのか、あるいはいくべきかについて理論的、実践的学びを得た。ブクチンの唱えるソーシャル・エコロジーの特徴は「人間と自然」の関係だけではなく「人間と人間」の関係に着目しているところにある。前者については、生態系の破壊や人類の危機を招いたのは、人間が作った社会システムが生み出した社会問題、たとえば資本主義、消費中心主義、成長主義が引き起こしていること。後者については、人間による自然の抑圧は人間の人間に対する支配の構造の反映であるという認識である。ブクチンの講義の中で特に印象に残っていることは、「エコロジー」という言葉は人間による自然の搾取の実態すべてを明らかにし、地球環境問題を解決する魔法の言葉ではないと強調していたことである。民主主義 (democracy)、自由 (freedom) といった言葉同様に曲解され、誤用されかねないとも言っていた。そして、花と緑でこの地球をいっぱいにしてしようと表面を飾ることにのみ関心があり、肝心の環境問題に横たわる根本的な原因、すなわちあらゆる差別、格差、貧困問題などの社会的公正について目を向けようとしない環境主義者を批判していた。たとえば「自然にやさしい」企業イメージを作り、利潤を追求するビジネスを「エコ・キャピタリズム」と表現していた。「環境にやさしい」「地球に優しい」などのイメージをアピールする一方、実態が伴わない見せかけのグリーンな取り組みを指す、「グリーン・ウォッシュ」(greenwash、greenwashing) をすでに見抜いていたのだろう。

ブクチンの思想は当然のことながら、イネストラ・

キングを始めとしたアメリカのエコロジカル・フェミニストにも多大な影響を及ぼした。

イネストラ・キングは「社会支配が女性蔑視と自然憎悪と相互に関連しているという、その核心をあばく綿密なフェミニストの分析がなければエコロジーは抽象化の域を脱せず不完全なものとなる」³と述べている。講義の中でもフェミニズムとエコロジーを結ぶ中心的な概念は「支配」であると主張していた。そして、エコロジカル・フェミニズムとは女性の抑圧、人種差別、経済的搾取、そして生態系の危機がどのように相互に関わりあっているかを理解する方法であると繰り返し述べていた。イネストラ・キングは1980年3月に米国マサチューセッツ州アマハーストにおいて開催された「エコロジーとフェミニズムに関わる女性と地球の生命会議 (Women and Life on Earth Conference on Ecology and Feminism)」を主導した一人である。1980年～1981年にかけては、約2000人の女性たちを集めて、アメリカ国防総本部(ペンタゴン)を、蜘蛛の巣状に包囲する「女性ペンタゴンアクション」を実施し、平和的な非暴力の抗議活動を行っている。地球環境を守ること、平等な社会を作ること、軍国主義と決別すること、核兵器、原子力開発をやめることを要求する非暴力の活動は、なによりも子ども(現在そして未来世代)の命と健康を守り、平和で人類と地球のよりよい関係の構築をめざす女性たちによって推進されたのである。

ソーシャル・エコロジー研究所での学びを糧に、帰国後、私はカタログを集めるようにエコロジカル・フェミニズムの論考や概念、各地のエコフェミニズムの実践を収集し、整理し発表してきた⁴。また、エコフェミニズムの実践が議論された「健康な地球のための世界女性会議 (World Women's Congress for Healthy Planet)」(1991年、米国フロリダ州、世界83か国、約1500人)に参加し、「私たちは、健康で持続可能な環境は、世界平和、人権尊重、参加民主主義、民族自決、先住民とその土地、文化、伝統に対する敬意、すべての種の保全があつてこそ、と信ずる。」から始まる「女性のアクション・アジェンダ

21」の採択の現場にもいた⁵。持続可能な開発におけるジェンダー主流化のための「グローバルな女性運動における重要な突破口、歴史的な分水嶺」と位置付けられているこの重要な国際会議にはインドのヴァンダナ・シヴァ、2004年にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイなど、名だたるエコフェミニストが参加していた。

女性のアクション・アジェンダ21」は1992年の地球(リオ)サミットで採択された行動計画「アジェンダ21」の第24章「環境と女性」に結実する。地球環境保全や持続可能で公平な開発、環境政策立案における女性の役割を認め、そのためには女性の地位向上が前提であることが明記された。環境と持続可能な開発の議論における女性の視点と女性の声は、グローバルで多様な危機や問題の解決の方向性を探るうえで、必要不可欠であることが認知され、ジェンダーの主流化が各国政府の取り組むべき重要な政策課題となったのである。そして、その理念はSDGsの前文「ジェンダー平等の実現と女性・少女の能力強化は、すべての目標とターゲットにおける進展において死活的に重要な貢献をするものである。人類の半数に上る女性の権利と機会が否定されている間は達成することができない」(パラグラフ20)となり、SDGsの全17目標を達成するための前提条件となっている。

おわりに

1999年に沖縄県石垣島で行なったエコフェミニズムの実践的調査について述べる。調査対象は1980年代半ばに沖縄県石垣島新空港建設問題に関わった地元の“オバア”たちである。新石垣空港建設反対運動は「サンゴ礁の海を守る」というスローガンのもと、IUCN(世界自然保護機構)など国際NGOも巻き込んでの闘争が展開されていた。闘争に積極的に参加していた女性3名に、彼女らのライフヒストリーも含めて聞き取りを行った。彼女たちの最も強烈なメッセージは、サンゴ礁を守る自然保護運動の背景に存在した確固たる「戦争反対」の意思であった。Kさんは語った。

「特攻隊の若い兵隊が、ばっちゃん明日の朝は、特攻隊で飛ぶよ。ここの上を3回飛ぶよって言ったから、布切れ持って3人の子どもと振ったさ。屋根の上を3回廻って特攻の若者が行った。帰ってこなかった。いまでもずっと覚えているよ。体当たりした兵隊さんのことを思うと、あのときの苦しさを思うと泣くね」。

空港建設が予定されていた白保には、第2次世界大戦中、陸軍の飛行場があった。住民たちはそのために何度も爆撃を受け、山に避難しなくてはいけなかった。加えて多くの若い特攻隊員が飛び立っていった記憶が「空港建設反対」に強く影響していたのである。空港建設は生活の基盤である海を破壊するだけでなく、いつか戦争につながってしまうこと、そのような戦争は生存に必要な生活の基盤を、命を破壊するというを経験的に知っていたのである。しかし、ウクライナで戦禍が続いているさなか、石垣島に、与那国島、宮古島に続いて、陸上自衛隊の「石垣駐屯地」が開設された。

エコフェミニズムという言葉が1974年に誕生してから、2024年で50年を迎える。近年、エコフェミニズムへの再評価が行われ始めている。エコフェミニズムが目指す社会は「平和で人類と地球のよりよい関係」、すなわち、破壊、暴力、争い、差別、支配といった言葉とは無縁の社会であることを忘れてはならない。■

《注》

- 1 国際婦人年 (International Women's Year) は、国連が女性の地位向上を目指して定めた国際年で、1975年を国際婦人年とすることを宣言した。「平等・開発・平和」をスローガンに同年、メキシコで第1回世界女性会議が開かれ、女性の地位向上のための「世界行動計画」が採択された。国際婦人年は、「国連婦人(女性)の10年」(1976-85年)として拡大され、以後、第2回世界女性会議(1980年、コペンハーゲン)、第3回世界女性会議(1985年、ナイロビ)、第4回世界女性会議(1995年、北京)で開催された。
- 2 2012年に両誌は統合され、『Resurgence & Ecologist』誌と改名。
- 3 イネストラ・キング(1989)「エコ・フェミニズムとフェミニストのエコロジーに向けて」『女性VSテクノロジー』新評論。
- 4 日本のエコフェミニズムの歴史については森田系太郎「日本のエコフェミニズム40年——第一波から第四波まで」(2022)を参照していただきたい。
- 5 萩原なつ子(1992)「健康な地球のための世界女性会議に参加して」『婦人教育情報No.25』国立女性教育会館。

《参考文献》

- 萩原なつ子(2001)「ジェンダーの視点で捉える環境問題—エコフェミニズムの立場から」長谷川公一(編著)『環境運動と政策のダイナミズム』、有斐閣
- 萩原なつ子(2003)「エコフェミニズム」奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子編『概説フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房
- 萩原なつ子(2015)「環境と女性/ジェンダーの主流化」亀山康子・森晶寿(編著)『グローバル社会は持続可能か』、岩波書店
- 萩原なつ子(2019)「ジェンダー平等を実現しよう」阿部治・野田恵(編著)『知る・わかる・伝えるSDGs I 貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生』、学文社
- 森田系太郎(2022)「日本のエコフェミニズム40年——第一波から第四波まで」『ジェンダー研究と社会デザインの現在』萩原なつ子監修、萩原ゼミ博士の会著、森田系太郎編著、三恵社
- マレイ・ブクチン(1996)『エコロジーと社会』藤堂真理子・戸田清・萩原なつ子訳、白水社